
捻くれ少年と生徒会長とその仲間たち。

日生 右月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捻くれ少年と生徒会長とその仲間たち。

【Nコード】

N1107Y

【作者名】

日生 右月

【あらすじ】

捻くれている？それならそれでいいじゃないか。捻くれてて何が悪い。

捻くれ少年、神林の学園生活を描きます。

俺は俺だ。

「ねえねえ、神林君^{かんばやし}って自分のことどう思ってるの？」

「俺は俺だ」

俺はそう答えた。俺が俺じゃなかったら俺は何なんだ。

「いや、そうじゃなくてね。神林君が神林君なのは知ってるの。というか、神林君が神林君じゃなかったらわたしは誰と喋っているのかわからなくなっちゃうじゃない」

「そうだな」

中々筋が通っている。さすが生徒会長。

「改めて訊くね。神林君は自分のことをどう思っているの？」

「どうって言われてもな。俺は俺だと思っているとしか答えようがない」

俺は何故、学校一の美人と謳われる生徒会長で、かの有名な大愛グループの一人娘で、帰国子女で、異国情緒溢れていて、花も恥らって、成績優秀で、容姿端麗な大愛愛^{おおあいあい}と中学校からの帰路に就いているのだろう。

話は今日の数学の時間へと遡る。

「起きてよ、神林君」

俺はマイ枕を持参して机で寝ていた。それなのに俺を無理矢理起こす大愛。

「ああ？ 何だあ？」

俺は起こされて気分が悪い。その様を見るクラスメイトと先生。

「授業中なんだから寝てちゃ駄目でしょ」

「はあ？ 授業中だから寝てていいんだろ？」

「変なこと言っただけさあ、起きた起きた！」

「沖田なら俺の三つ前だぞ」

そう言っ て俺は前を指差す。沖田が「え？」という顔をする。笑うクラスメイト。先生も少し笑っていたのを見逃さない。

「沖田に用があるなら俺を起こすなよ。じゃあ、おやすみ」

「ええー」

またクラスメイトが笑う。

「そうじゃなくて！ ちゃんと起きて授業を受けなきゃ駄目でしょ！」

「いやいや、先生には授業しなければならない義務があるけど、こっちは授業を受けてもいいという権利だけだからいいんだよ。さあ、先生も授業をやらないと義務を果たせませんよ。じゃ」

マイ枕セツト。顔設置。睡眠モードオン。

「駄目でしょ！」

ドガツ！ 頭に激痛が走る。

「うがぁ！ ああああああ！！」

俺の雄叫びがクラス中を駆け巡る。

「頭蓋骨割れた〜！ 脳震盪だ〜！ 心筋梗塞だ〜！ 金縛りだ〜

！ 雲真っ 赤出欠だ〜」

「蛛膜下出血ね」

「ツツコミ入れるのはそこ以外もあるだろ〜！」

「つか、こいつ何した！？」

「えっと、この三角定規の角で頭を刺したの」

「はあ？！」

頭を押さえていた手を見る。若干、赤い液体らしきものが……

……………。

そこで意識が途絶える。

ベッドで目を覚ます。ここはどこだ？と考えるまでもなく保健室だ。大愛の顔が目映る。

「Oh、I？」

「大愛よ。それより、大丈夫？」

「これが大丈夫に見えるやつは相当の老眼か失明しているかのどっちかな」

頭には包帯を巻いている。

「ただの切り傷だつてさ」

刺し傷じゃないのか？

「起きたの？」

女性の声をする。

「はい、起きました」

「じゃあ、大愛さんは授業に戻つてね」

「えっ、いや、その……」

「神林君を看てたいのは分かるけど、授業には出ないとね」

「はい……分かりました」

大愛は保健室を出て行く。

「その傷で神林君なら明日か明後日には治るわよ」

保健室の加賀崎^{かがさき}先生が言う。さっきの女性の声も加賀崎先生だ。

「それって俺が化け物並みに再生力があるって言っているように思えますよ」

「ええ、そうよ」

は？

「何言っているんですか。俺はただの一介の中学生ですよ」

「神林君って骨折多いわよね」

俺は中一と中二の二年間で骨折で四回病院に運ばれている。原因は思い出したくない。

「まあ、そう、ですね」

俺はぎこちなく言う。

「でも、かなり早く治っているわね。一番いい成績が左肩の脱臼と左腕の単純骨折ね」

そんなこともあったな。確かアレは二年のとき、ハンドボール投げをしている最中に起こった事故だ。先生の所為で思い出してしま

う。俺がハンドボールを取ろうとしてあまりの重さに肩が脱臼。そこに前のやつが投げたボールが俺の腕に直撃。奇跡だ。

「あの時は常人よりも一ヶ月以上早く回復。しかもリハビリ無しで普段通りの生活に復帰。治癒力がとても優秀ね。頭とは比べ物にならないくらいね」

この先生、たまに毒を吐く。保健室の先生なのに怖い。学校の怖い先生ランキングの五位内には必ず入ってくる先生だ。

「ああ、そうですか」

こう答えるしかない。

「もう五時間目終わって六時間目よ。授業に行く？」

「いえ、下校時刻までここにいます」

「そう、じゃあ、篠原先生にそう伝えておくわね」

「お願いします」

篠原先生は俺のクラスの担任だ。社会の先生。無駄に法律に詳しく、俺も篠原先生の影響を受けて法律をたまに勉強している。が、先生になるつもりも弁護士になるつもりもない。俺はただ、いまこのときの学園生活を謳歌している。

「じゃあ、もう一眠りするか」

俺はそう呟くと睡眠モードに入る。

「神林君。起きなさい」

誰かの声が聞こえる。この声は加賀崎先生だ。

「もう五時よ。そろそろ閉めるから起きて頂戴」

「ふあい」

俺は適当に返事をして起き上がる。少し頭が痛むがこれくらいなら大丈夫だ。

「それと、裏門で大愛さんが待つてるって言っていたわよ」

「はあ……」

それがどうしたと言うのだ。俺には関係ない。

「行ってあげなさい。何か神林君に言いたいことがあるみたいだっ

「だから」

「はい」

先生が言うなら仕方がない。先生に言われたのに行かなかったらあとでかなり悲惨な目に合う。合ってきた生徒を何人も見てきた。

「さあ、あそこに鞆があるから、持って行きなさい」

「了解です。ありがとうございました」

俺はこれまた適当に言い、鞆を持ち、保健室を出る。

「じゃあ、さようなら」

「さいならー」

俺は靴を履き替え、裏門へ。大愛がいた。

「あつ、神林君」

「何だ？ 俺に用事か？」

「いや、その用事ってほどじゃないんだけど、とにかく、一緒に帰ろう」

「おいおい、何だこの展開！ まさかの告白か！？」

「ん？ ああ、いいぞ」

俺は動じない素振りを見せながら歩く。その横を大愛が歩く。

そして、今。

「捻くれてるって思わないの？」

「思う。し、それでいいと思っている」

「それがいいと思っているんでしょ」

「え？」

何だ、突然。

「自分は捻くれてて社会から逸脱していて、それでいて、そんな自分に満足している。そんな感じでしょ」

「何を知ったようなことを」

「知ってるよ。だって一年生の時、初めてオーストラリアから来たときからずっと見てたから」

ストーカーかよ。いやいや、そんな思想ではいけない。今の雰囲気は合っていない。

「そして、大愛グループの力を使って神林君の経歴を洗いざらい調べさせてもらったの」

これは完全なるストーカーだ。

「好きな食べ物、動物は勿論。好きな異性のタイプ、好きな異性の仕草、その他諸々何でも知っている」

「マジかよ……」

俺はそういう色物語ることとはかなり疎遠な存在だから親友に彼女がいることすら、先月知ったばかりだぞ。当人は中学校の入学式に一目惚れして即座に告ったらしい。勇気あるなあ。

だから好きなタイプは愚か、仕草など一度も言ったことはない。

「そんなバカなことがあるかよ」

「あるのよ。多分、神林君は髪が長くて背が自分と同じくらいで足が長い女性が好きでしょ。だけど、自分の同級生の兄弟とは結婚したくないと思っているんじゃない？」

100%正解だ。どうなってるんだ？

「好きな仕草は本のページが風で捲られて『アッ！』って時の手ね
何でも完全なる正解を叩き出すんだ？ ストーカー恐るべし。
「大愛グループの心理学科の人に神林君のことを研究してもらったの。モニターの一人としてね」

「何、勝手にやってんだ！」

「それで、今日はそのお礼金を渡そうと思ってたの」

えっ、じゃあ告白はないのか……。

「告白してほしいの？」

「は？」

「いえ、何でもないわ。はい、お礼金」

「ああ、ありがと」

俺は封筒を受け取る。重い。

「ざっと200万円」

「はあああ!？」

モニターってそんなに貰えるのか!? それなら何でも受けるぞ!

「じゃあ、わたしはこれで」

「ああ、ありがと」

気づくと俺の家の前にいた。大愛はどうやって帰るんだ?

「あ、そうだ。神林君は今、わたしがどうやって帰るのか気になったと思うけど、わたしには専用のリモコンがあるから心配しないですね」

そりゃあ、いいご身分で。

「じゃあ、また明日、学校で」

そう言つと大愛は歩いて行つてしまふ。いや、別にいいじゃないか、あんなストーカーやろ。そうは思ったがそうは思い切れなかった。何だろう、この感じ。まさかこれが恋? ま、恋でも殺意でも同じだな。どっちにしろ、人を滅ぼすことには変わらない。

俺はため息を吐きながら家に入る。

俺は俺だ。
(後書き)

僕としては禁断の(禁断か?)ラブコメ学園ものです。別シリーズをやっているのにこれに現を抜かしていてもいいのでしょうか。と思いつながら手も止まらずに書き上げてしまい、短編にしようと思つたのに、色々続きそうな感じになってしまい……。とにかく、変な感じにならないように頑張ります!(もうすでに変な感じになつていそうです)応援、よろしくお願い致します!

何故俺がエコ活動について考えねばならないのだ。

「神林君、起きて！」

大愛の声だ。確かに俺は寝ているがもう放課後だ。なのに何故、俺は大愛に起こされる必要があるんだ。俺はそう思い無視する。

「三角定規出すよ」

俺は飛び起きる。何だこの恐怖政治。200万はよかったが、毎日保健室行きは地獄だぞ。加賀崎先生が閻魔大王だ。

「何だよ」

「神林君、先生の話、聞いてなかったの？」

「聞いてなかった」

いつもの如く寝ていたに決まっている。

「ゴールデンウィークにみどりの日ってあるでしょ」

「そうだな」

「その日に皆でエコ活動しよう、ということになったの」
ほうほう。いい心構えではないか。

「頑張りたまえ。じゃあ、俺は睡眠タイムに……」

「それで、その日は学校に集まってやるの」

ほうほう。いい心構えではないか。

「そうか。皆の衆、頑張りたまえ。じゃあ、俺は睡眠タイムに……」
「だから、その日に何をやるか、今から考えるの」

ほうほう。いい心構えではないか。

「そうか。皆の衆、しっかり考えたまえ。じゃあ、俺は睡眠タイムに……」

「神林君も一緒に考えるの」

ほうほう。いい心構え……ん？

「は？ 何で俺が」

「何でって神林君もこのクラスの一員でしょ」

「いやまあ、そうだけど」

「だから、一緒に考えるの」

「何故」

「だから！ 神林君もこのクラスの一員だから！」

「何故」

「そんなの知らないわよ！」

「何故」

「何でも知っているわけじゃないのよ！」

「何故」

「神林君のデータによると、この話はあと2時間は続くわね」

こいつ、心理学を取り出してきたな。

「なあ、会長さん。データって何？」

俺の後ろの席の谷沢が訊く。余計なことを！

「まあまあ、気にするな」

「いやいや、気にするから。神林、教えろよ」

「わたしが神林君のことを洗いざらい、心理学も取り出して調べたの」

「へえ」

谷沢が頷く。それ以上は追求してこない。じゃあ、何で訊くんだ！

この野郎、『天国席』の一つ、窓側の一番後ろに座っているくせに真面目に勉強してやがる。その所為で俺が怒られるんだ！

「お前は黙ってる！」

谷沢に一喝。

「それで、皆で何をやるか考えるの」

「その台詞はさっき聞いたな」

「神林君のことだから忘れていると思ったわ」

俺は一体、大愛にどういう目で見られているんだろう。

「さあ、考えましょう」

「班ごとなのか」

「ちゃんと先生の話聞いていないと駄目でしょ」

「はい」

まあ、寝るけどな。

「で、どんなのがいいんだ？」

「先生はテレビをこまめに消すとか、使わない部屋の電気は消すとかを例にあげてたわ」

「じゃあ、学校来る必要ねえじゃん！」

「クラス中のみんながそう思ったわ」

「でも、神林君は寝ていたけどね」

突然喋り出す閻雲やみくも。大愛の後ろで谷沢の隣の席だ。俺、大愛、谷沢、閻雲が俺の班のメンバーだ。キャラの個性が強過ぎる。いや、閻雲は存在感が薄過ぎてキャラが濃過ぎる。

「それはもう掘り返すなよ」

「フフツ」

怖っっ！

「じゃあ、神林君、考えて」

「何故俺がエゴ活動について考えねばならないんだ」

「班長だから」

「俺は班長になった記憶はないぞ」

篠原先生は一番初めに席替えをした。去年も一昨年もそうだった。席を移動した後は記憶がない。寝ていたんだろう。

「お前が寝ていたのが悪い」

「谷沢は黙ってる！ 班長権限だ！」

「そんなものねえだろ」

「いいから黙ってる！」

それから俺と大愛と、たまに会話に入ってくる閻雲と、俺が口にガムテープ、両手を椅子の後ろに回してガムテープ、という状態で喋れなくした谷沢とで話し合いをした。実際に喋れたのは俺と大愛、閻雲だけだった。が気にしない。大愛も閻雲も。

ある程度意見が纏まり、解散する全員。俺は谷沢のガムテープを外していない気がしたが先生が見つけるだろう。心配ない。というか、見つけなくても別にいい。

何故俺がエコ活動について考えねばならないのだ。（後書き）

言うほど神林が捻くれていないことに気づきました。これからはもう少し神林の性格を捻じ曲げてみようを思います。前回、ラブコメ学園ものという話をしましたが、今回はラブの部分が多くありません。それだけラブの部分はやらないほうがいいという警告でした。かなり前途多難ですがこれからも頑張ります！応援よろしくお願い致します！

篠原先生は変だ。だが、俺が心配する必要性は皆無だ。（前書き）

変換ミスではありません。

篠原先生は変だ。だが、俺が心配する必要性は皆無だ。

「じゃあ、今日は銃刀法について勉強するぞ」

俺は篠原先生の授業は受ける。いや、体育だって、美術だって、音楽だって受けている！ その他は寝ているんじゃないか、という質問に対してはノーコメントだ。

「銃刀法の正式名称は銃砲刀剣類所持等取締法という」

篠原先生は黒板に『十放蕩堅墨諸事党鳥閉法』と書く。これだから篠原先生の授業は面白い。

「この法律は1958年から施行されたんだ。テストに出すから覚えておけよ」

『Thank You珀呉中鉢念思考』

千九がThank Youってそんな馬鹿な……。

「これに違反するには銃を輸入するとか、所持するとか、発砲するとか、銃の部品を輸入するも逮捕されるな。注意しろ」

違反するにはってという説明の仕方がおかしい。

『伊波ん砲報・・・住の湯柔、諸事、発泡、部費んの湯柔』

発泡、惜しい！

「譲り渡すのも駄目だな。見つからないようにやれ」

見つからないようにって、やらないから！

『城戸も無凶化しい』

「そして、刃渡り15センチ以上の刀がアウト。刃渡り5・5センチ以上の剣、ナイフもアウト。槍とか薙刀もアウトだ」

アウトって、ゲームじゃないんだから……。

『田中・・・歯巨理銃後戦地異常。県、内府・・・呉典呉戦地異常。矢理、風奈多も合うと』

刀が田中になってる……。あれ？ よく見るとこっちでは『銃』って書けてるぞ？！

「あれ、読みにくいよな」

俺は大愛に言う。

「今更でしょ」

一蹴された。まあ、確かに今更だけど。

何事もなく、いつものように、普段通り、問題なく、恙無く、授業が終わった。

「ねえ、篠原先生を治さない？」

大愛が話してきた。

「直す？」

「違って、治す」

「篠原先生は病気なのか？」

「あれはほぼ病気でしょ」

うん。否定できない。

「だから、あれを治すのか？」

「そう」

「確かに篠原先生は変だ」

「そうでしょ」

「だが、俺が心配する必要性は皆無だ」

「そんなこと言わないで。さあ、どうしよう」

「考えてあるんじゃないのか？」

「ないわよ」

「考えてから喋れよな」

「面倒」

生徒会長のくせに何を言っているんだ！とは口が裂けても言えない。

「無理だろ。あれは不治の病だ」

谷沢が口を出してくる。

適当にあしらって俺と大愛だけの話に戻る。闇雲は聞いているだろうが殆ど何も言っていないから大丈夫だ。因みに、俺の席の前に笠立、母壁、沖田、飯塚いいつかがいるが、今この場合は無視だ。大愛の席の前にもいるが無視だ。別に警戒するほどのことじゃないけどな。

「まあ、どこかの馬鹿が言ってきたようにあれは不治の病だ」

「どこかの馬鹿って、いま神林君がラリアットを食らわせて失神している谷沢君のこと？」

「ご名答。正解者に拍手。」

「無理なものは無理だろうから何もしないでそつとしておくのがいいと思うぞ」

「それもそうね」

納得早っ！ 話終わり！？

「じゃあ、次、理科室だから先に行くね」

大愛は行ってしまった……。別に残念がることはない。別にどうとも思わない。別にこれから谷沢をどうすればいいかを考えていただけだから。別に何かを感じることはない。別に大愛とあんな関係になれたらとか、別に大愛とどこかへ行きたいなとか、そんなことは一切考えない。別に考える必要性がない。篠原先生のことを考える以上に。別に、な。

篠原先生は変だ。だが、俺が心配する必要性は皆無だ。（後書き）

篠原先生……よくこれで先生になれたな……と、思っていただけ
ばいいな、と思って出来た先生です。これから応援、よろしくお
願い致します！

今後、何かがあるかもしれないから予備知識として知っていてもらいたい。

《「別に説明する必要性はない」

こんなこと、何の為に説明しなくちゃ駄目なんだ。

「だが」

俺は一度言葉を切る。

「今後、何かがあるかもしれないから予備知識として知っていても
らいたい」

つまり、それは、

「俺のクラスメイトの名前と教室での席だ」

前回、名前だけ登場したのが笠立、母壁、沖田（初回も登場）、
飯塚。こいつらの場所もしっかりマークしていてもらいたい。特に
どうでもいいかもしれないが、お付き合い願う。

「まず、俺のクラスは縦6人、横6人の36人のクラスだ。男子女
子、共に18人」

俺は窓側の前から5人目、後ろから2人目。

「俺の後ろが谷沢。一番前が飯塚、次に、沖田、母壁、笠立の順だ」
そして俺の右の列。前から友栄、宅江、古渡、細口、大愛、闇雲。
「真ん中の2列は面白いから後で」

通路側の前から（女子列）、人星、人西。そしてここからも面白
い。

「喜屋武。読めない読めない！ そして、その後ろ、川奈部、小迎
森、明月院」

この3人はかなりの金持ちだ。だが、大愛のそこほどではないら
しい。

「その左の列。人魯、独島。さっきの人星、人西の4人全員、名字
に『ひと』が入っているという珍しい班だ」

後ろの柳下、若戎、流川、洞井。こちら辺はカッコいい。

「最後に問題の真ん中の2列。窓から3列目の男子列から説明しよ

う」

前から兵法、領地、陣、尾城、堀、本丸。すげえ。もの凄い奇跡。

「さらに奇跡続きで、女子列の羽柴、武田、真田、伊達、織田、徳川」

信じられない奇跡だ。

「これで全員だな。篠原先生も一応クラスの一員」《
っていう夢を見たんだ」

「へえー」

大愛は興味なさそうだった……。挫折しないぞ！

今後、何かがあるかもしれないから予備知識として知っていてもらいたい。

（後

まさかの夢オチ？
ですが、クラスの『仲間たち』を紹介することが出来ました。

200万に関する夢と悪夢と希望と野望の物語。

「突然だけど訊いてもいい？」

「駄目」

「あの200万円何に使った？」

俺は駄目って言ったぞ。確実に駄目と言った。なのに何故大愛はさも当然のように訊いてきたんだ？

「適当に消費した」

「適当につてどのように？」

「適当には適当にだ」

「適当には適当につてどのように？」

「適当には適当には適当にだ」

「適当には適当には適当につてどのように？」

「しつこいぞ」

「しつこいってどのように？」

「このようにだよ」

「このようにつてどのように？」

「本当にしつこいぞ」

「本当にしつこいってどのように？」

「お前のようにだよ！」

「私のようにつてどのように？」

「お前、自分がなにやってるのか分からないのか？」

「分からないってどのように？」

「分からないってどのようにつてどのように？」

「しつこいわね」

「そうだろ」

やっと分かってくれたか。俺はほっとする。

何故、俺は大愛とこのような会話をしながら下校しているのだろう。それはつまり、大愛は、その、あれだ。多分、俺のことを、だ

な。おそらく、きっと、あれ、なんだろ。だから、わざわざ歩いて、俺の、家の、前、まで、来るんだろ。お、俺は照れてないぞ。断じて照れてないぞ。

あれから　どれから？という質問が飛び交う可能性があるので説明しておく、一番初めに200万を貰った日から　大愛は俺と帰っている。若しくは、俺は大愛と帰っている。だが、付き合っているという噂は全くもって一切流れない。誰も信じない噂は流さない、と『歩いて走って踊れる噂情報誌』という渾名を持つ、兵法が言っていた。つまり、俺と大愛が二人で歩いていた、という噂は流されないイコール誰も信じない、ということらしい。それはあまりにも失礼じゃないか？俺にとっても、大愛にとっても。誰が誰を好きでもいいじゃないか。他人が介入することじゃない。そう思う俺は恋やら愛やらそういうものには専ら縁がなかった。大愛に会うまでは、というか大愛と一緒に下校する、ということが始まらなければ。だからといって、大愛じゃなかったら俺は誰とも恋愛などというものをしなかったのか、と訊かれても、それはイエスとは言えない。俺には大愛しかないかどうかなんてまだ分からない。なのに、今、『俺には大愛しかない』などと荒唐無稽なことを嘯いてみても顰蹙を買うだけだろう。おそらくはな。

とか何とか思っていると大愛に睨まれていた。

「で、どうなの？」

この大愛という一人の女子について分かったことがある。それは大人がいる時といない時では若干、口調が変わる、ということだ。それは追々誰にだって分かるだろう。

「何がだ？」

「200万円。自慢じゃないし謙遜して言うけど、家は大金持ちよ」
どこが自慢じゃなく謙遜しているんだ！？

「あら、これを自慢しながら謙遜しないで言うと、私の家は超超超超大金持ちよ」

いっそそっちの方が清らしいよ。

「だから、200万円なんてものは1円の価値すらないわ」

「いやいや、そこまでじゃないだろ」

「ええそうね。1銭の価値すらないわ」

そういう意味じゃねえよ。

「でも、庶民で常人で凡人で鈍才な一般人である神林君にとってはそうではないわよね」

なんだか胸に深い傷を負った気がする。

「まあ、そうだな」

あまり認めたくはないが認めた。強ち嘘ではない。言ってしまった本当だ。だからといって、そんなに真直ぐ本当のことを言っていないとは言えない。

「それでその200万円を何に使ったのかを知りたいの」

「ご想像にお任せする」

「わたしは想像力なんて欠片もないのよ。知らないの？」

知っている。こいつは大体の教科の成績はいい癖に想像力が欠けている所為で美術が悪いらしい。絵は上手いらしいのだが（情報提供者、『歩いて走って踊って回る最新情報誌』こと柳下）。

「しょうがないな。じゃあ、俺の200万に関する夢と悪夢と希望と絶望の物語、始まり始まり」

大愛は拍手してくれた。なんかちょっと嬉しい。

「俺はあの日、大愛から200万を貰った。だが、そのまま封筒を持っでゆくと姉や弟や兄や妹になにやら言われてしまいそうだった」

「ご兄弟がいるの？ 私のデータにはないけど」

バレてる。そう、俺は一人っ子だ。

「というのは冗談。父さんに奪われかねなかったからどうにかしようとして右往左往していたんだ」

「神林君のお父様は仕事が忙しくて毎日12時過ぎにならないと帰宅しないはずよ」

これまたバレてる。

「というのも冗談。母さんが金に目ざとく、俺の封筒の中身を見よ

うとしないかどうか、俺は不安で不安であれからかれこれ1時間ほど外にいたんだ」

「神林君のお母様も仕事が忙しく、毎日11時半にならないと帰宅しないはずだけど」

何でこいつはこんなに知っているんだ。

「というのも勿論、冗談」

「わたしをからかっているの？」

「いや、まさか。でも、お前はそんなことを知っていなくてもいい、ということさ」

「ふうん」

納得した！？　これはありがたいぞ！

「じゃあ、神林君の部屋の机の三番目の引き出しの中に入っている封筒の中身の200万円は何なのかしらね」

「はああああ！！！！？」

俺は咄嗟に飛びのく。その所为で頭を電信柱にぶつける。痛え。だが、それ以上に問題があるぞ。

「お前、まだ俺のストーキングしているのか！？」

「そうよ。モニターをずっとやってもらっているわ。また一定のデータを取ることが出来たらお礼金を渡すわ」

何だよそれ……。

「おい、じゃあ、何で俺に訊いたんだ！？　お前は200万を俺がどこにやったのか知っているんだろ！？」

「ええ。こういう場合、神林君ならどのような反応を示すのかを調べさせてもらったの」

「趣味悪っ！」

「そう言うだろうと思ったわ」

「じゃあ、今まで、俺と一緒に下校していたのもそれなのか！？」

「ええ。その一環でもあるわ」

最悪だ……。いや、そもそも俺は何を期待していたんだ。大愛だろ、こいつと俺とでは違い過ぎる。

「ただし、その一環でもあるわけで、その為だけではないのを覚えておいてね」

大愛が俺に微笑む。悪魔だろ。

「神林君の家に着いたわね。じゃあ、わたしは帰るから。また明日ね」

「ああ」

大愛は走っていった。

「何なんだよもう!」

俺は思いっきり叫んだ。頭の痛みを紛らわす為にも、俺の頭のどこかにある恋やら愛などの文字を吹き飛ばす為にも。

200万に関する夢と悪夢と希望と野望の物語。（後書き）

名前と教室での席しか出てきていない兵法と柳下に新たな個性が生まれました。なんだか重要キャラになりそうな予感がします。そんな感じの（どんな感じの？）この物語！ これからもどうか応援や感想、お願い致します！

俺は俺は俺は俺は……。

「ねえ、神林君。連休中に一緒にどこか行かない？」

今日は卯月末から皐月初めにかけての大型連休、つまり黄金週間。所謂、ゴールデンウィーク。日本中が歓喜するその連休の前日。俺は、また大愛と下校していた。もう慣れた。

「連休って言っても、3日は不治の病を持つ先生がエコ活動と称してみんなを学校に集めるんだろ。その所為で今年はどこにも行けないんだ」

まあ、毎年どこにも行っていないけど。

「何言っているの？ 行かない人もいるわよ」

「は？」

「先生も事情がある人は来なくてもいいって言ってたし」

「え？」

「サッカー部、野球部、バスケット部、卓球部、テニス部、バドミントン部の人は練習試合で行けないし、吹奏楽部は音楽の高鍋先生が個人練習をやるようにって言って誰も家から出れないらしいわ」

吹奏楽キツッ！ 俺だつて流石に家からは出るぞ。

「美術部は博物館での絵の博覧会に行くみたいだし、行くのはわたしと神林君だけよ」

「ええ！？ じゃあ、谷沢は！？ あいつも無所属だっただろ！」

「谷沢君は塾に泊まりこみで勉強だつて」

そんなことしても俺より成績下だろ……。可愛そうなやつだ、と同情はしない。

「じゃ、じゃあ、柳下と兵法は！？」

「学校情報部の定例会議に出席するらしいわ」

「そういえばあいつら、そんな部活だったな……」

「本丸君と喜屋武さん、若戎君と真田さんはデートですって」

「へえ、デートね」

羨ましくなんかないぞ。うん！

「明月院さんはフランス旅行、小迎森さんはオーストラリア旅行、川奈部さんはカナダ旅行らしいわ」

フランス、オーストラリアはともかく、カナダってどこか見に行くところあったか？ 俺が知らないだけか？

「流川君はカヌー体験、洞井君は鍾乳洞探索に行くと言っていたわ」
名前とまんまじゃねえか！

「人魯と独島は！？」

「人星さん、人西さんと一緒に人間観察」

「はあ！？」

どんな趣味してんだ……。しかも四人でって……。

「あと残ってるのは……」

「わたしと神林君だけよ」

「ぐはっ！」

俺は倒れそうになる。足が何とか踏ん張ってくれた。だが、頭痛がする。

「よし！ 一緒に出かけよう！ なんとかとしても篠原先生から逃げなければ！」

「もう、準備してあるから着替えを用意しておいて。10時くらいに向かえに来るからね。じゃあね」

「え、いや、どこ行くの？」

大愛は答えることなく走り去って行った。丁度俺の家の前だった。
「今日からって、父さんと母さんが許すはずないよな」

家に入り、一応連絡を取る。

「もしもし？ 神林だが」

「もしもし？ 父さん？」

「おお、どうした？」

「今日から、友達と遊びに行っていていい？」

「いいぞ」

いいのかよ！

俺は俺は俺は……。 （後書き）

神林君の雄叫びが出ました。今回はちょっと続きます。どこに行くのか分からない大愛とのデート（？）どうなるのか分かりませんが波乱万丈間違いなし！ 次の更新まで、次の更新からも、応援よろしくお願い致します！

楽しみにしておこう。

「オッケー取れたから、荷造りするか」

俺は自室へ行き、スーツケースを取り出す。

「一応、2日分の着替えとジャージを用意」

何故か独り言が出てしまう。大愛と出かけるのをそこまで楽しみにしているんだろうか。

「あとはケータイっと」

ケータイ、充電満タン確認。

「あ、俺は大愛の番号知らない……」

その時、俺のケータイに着信。

「知らない番号だな。誰だ？」

俺は電話に出る。

「もしもし」

『大愛よ』

「お、大愛！ どうして俺の番号を知っているんだ？」

『あなたの寝言はケータイの電話番号よ』

「マジかよ……」

『先生ですら知っているわ』

絶句……。

『とにかく、10時に迎えに行くからその頃には外に出ていてね』

「分かった」

『じゃ』

電話を切られた。もう少し喋りたかったな、と思う自分が心のどこかにいる気がする。

「とりあえず、大愛の番号を登録！」

ラッキーだ。

「えっと、今が6時だから、あと4時間か……」

晩飯と風呂だな。

台所へ行き、適当にチャーハンを作る。プロの料理人を意識。

「よし、完成！」

即行食べる。1人前5分で完食。

「次は風呂だ！」

チャーハンを作っている間に沸かしてある。2分で洗い、3分浸かる。計5分。

「チャーハン作るのに時間かかってもう7時か。あと3時間だな」それから俺はマンガを読んだり、ゲームをしたり、テレビを見たりしていたはずだが、全く記憶にない……。どうしたものか……。

「おお！ やつと9時50分！ 外に出よう！」

俺はスーツケースを持ち、外に出る。ちゃんと家の鍵もかける。そこへケータイにまた着信。大愛からだ。

「もしもし。もう外に出てるぞ」

『知っているわ。あと10秒で着くから』

そう言うのと電話は切れた。10秒だったら電話しなくてもいいんじゃないか？

「お、来たか？」

そして1台の車が俺の家の前に停まる。リムジンだった。この住宅街にどうやって入ってきたんだろう。謎だ。

「……………」

俺は声が出ない。

リムジンの運転席からスーツの男　　というか爺さんが降りてきた。俺に一礼してきたので咄嗟に礼をする。その爺さんが後部座席のドアを開ける。そこにいたのは、

「大愛……か？」

いつもとは雰囲気があるで違う大愛が降りてきた。でもこいつは確実に大愛だ。間違いない。

「神林君、待った？」

「いや、大丈夫だけど……」

「じゃあ行きましょ」

「う、うん」

俺は大愛につられてリムジンに乗る。途轍もなく広い。これが車か？

「では、お嬢様参ります」

「お願いします」

大愛が爺さんに満面の笑みでお願いする。俺もこんな風をお願いされたい、とか思ってしまった。

車が動きだす。

「なあ、さっきの爺さん誰だ？」

「OESの1人、佐々原さんよ^{ささはら}」

「OES？」

「大愛家専属執事 O a i E x c l u s i v e S t e w a r
dの略よ」

何だか難しそうなので訊くのをやめた。

「わたしには佐々原さんがついているの。お父様は大川さん^{おおかわ}、お母様は蝦夷森さん^{えぞもり}」

「川と森と原か……」

「そうね。それには気づかなかったわ。流石は神林君ね」

「いや、褒められることじゃないんだけど……」

「これから、空港へ行くわ」

「空港？」

「そう。そして大愛家自家用ジェットで飛ぶから。飛行機は大丈夫よね」

「大丈夫だけど……。本当に自家用ジェットなんてあるのか……」

大愛は笑って何も言わない。

「飛ぶってどこへ？」

大愛は笑って何も言わない。

「あの、大愛さん？」

大愛は笑って何も言わない。

「怖いですよ」

何も言わない。

「ま、まあ。楽しみにしておこう」

「それがいいですわ」

やっと喋ってくれた。ほっとした。心の底から。

俺は自殺なんかしないぞ！

「自殺！？ ちょっと待て！ 俺は自殺なんかしないぞ！」

俺は大愛家の自家用ジェット内で叫ぶ。というか吼える。

「自殺じゃなくて視察。分かった？」

「視察？」

「神林君を今日、誘った理由は北海道に新しく出来た、大愛グループの遊園地の視察」

遊園地も作っちゃうんですか……。すごいっすね、大愛グループ。オープンには5月5日で、4日まで入念に点検をやるの。でも、わたしたちは単純に視察をするだけだから簡単よ」

「いやいや、視察って何するんだ？」

「遊園地で遊ぶだけ。2人だけで」

2人だけで、だと！？ 何故か心が跳ね回って躍っているぞ！

「もう1つ」

2人だけで遊ぶっていうのだけでいいぞ！ もう1つなんていらないぞ！

「遊園地の命名」

「ユウエン家の姪、メイ？」

ユウエって誰だ？ そいつの姪がメイなのか？

「そうじゃなくて、遊園地の命名」

「命名つてのはあれか？ 名前を付ける……」

「そうよ」

責任重大じゃないか！

「北海道のどこなんだ？」

「稚内」

「稚内か……」

確か、北方領土を抜いたら日本最北端だったっけ？ 今はまだ寒いんじゃないか？

「そんなところに作って、儲かるのか？」

「そんなところなんて言わないで！　どんなところであろうと住んでいる人に対して失礼よ！」

怒られた。当然と言えば当然だ。

「了解です……」

ここですつと気になっていたことを言う。

「なあ、このジェットって他にも席あるよな」

「ええ」

「じゃあ、何でお前は俺の隣に座っているんだ？」

リムジンの中でもそうだった。せめて窓際に分かれることも出来たはずだ。

「誤解しないで。神林君がわたしの隣の座っているのよ」
「なるほど」

俺は席を移動する。大愛の席から4列下がった。

大愛も立ち上がる。

「どうしたんだ？」

「お手洗い」

ここでトイレと言わないところがお嬢様だ。

大愛は黙ってトイレに行く。流石自家用ジェット機、トイレ完備か。そういえばさっきのCAさんの話だと、シャワー室もあるとか言ってたな。大愛グループすげえ。

大愛が戻ってくる。そして、俺の隣に座る。

「ええ！？」

俺は元の席に戻ってないぞ！　つまり、大愛が意識して俺の隣に座ったんだ！　テストに出るから覚えておかなければ！　赤ペンで線引かないと！　特筆すべきことだぞ！　今の大愛の行動は！

「どうしたの？　神林君」

大愛が訊いてくる。

「いや、どうしたのって、それは俺の台詞だけど……」

「わたしはどうもしてないわよ」

「どうもしてなくてこの状態だったら俺がどうかしてるのか？」

「神林君はいつでもどうかしてるでしょ」

俺の胸に今の言葉が刺さる。

「授業中はいつも寝てるし、家に帰ったらパソコンやりっぱなしだし。拳句の果てに、先生より半歩先に教室に入って『遅刻じゃねえ！』と、先生と言い争っているのはいるのは完全にどうかしてると思うわ」

俺の胸に今の言葉が深く刺さる。

「まだ、あるわよ」

「もうやめてくれ……」

大愛はそれ以上、何も言ってこなかった。俺の要望を聞いてくれるのか？ 俺はあらぬ期待を抱いてしまった。

「さ、そろそろ着くわよ。シートベルトつけて」
指示に従う。

まもなく、ジェット機が降りる。

「行きましょう。ここは遊園地よりも少し高い場所にあって、遊園地を一望できるの」

外は予想通り、寒かった。だが、それ以上に、『遊園地』がすごかった。

「これが遊園地か？」

「神林君は遊園地に来たことがないの？」

「あるけど」

あるけど……これは……違くないか？

「ジェットコースター、あるわよ」

「普通はあんなに迷路っぽくない」

「コーヒークップもあるわよ」

「普通はコーヒーは入ってない」

「お化け屋敷もあるわよ」

「普通は高層マンションじゃない」

「メリーゴーランドもあるわよ」

「普通は馬とあったとしても馬車だけだ。間違ってもケータイやパソコンに乗るなんてことはない」

「醍醐味の観覧車もあるわよ」

「確かに醍醐味だが、観覧車は普通は丸だ。あれは、ハート型？」

「大愛グループの大きな愛を示しているらしいわ」

「はあ……」

ハート型ってちゃんと動くのか？ 落ちないのか？ あれを視察するんだろ？ やめてくれよ……。

「さて、ホテルへ行きましょう」

「ホテル？」

「あそこ」

大愛が指差した先にあったものは、お化け屋敷（高層マンションである時点で屋敷じゃない）。

「えっと、お化け屋敷？」

「そう。あの3階から上がホテルなの」

「3階には泊まりたくないぞー！」

「その名もホテル・ザ・屋敷」

センス悪いと思うぞ、俺は。だが、お化けの方を持ってこなかっただけまだマシだ。

「わたしたちは視察だから最上階のロイヤルストレートフラッシュルームに泊まるわ」

ポーカーで同じマークの10・J・Q・K・Aを取ったときみたいな名前だな！

「じゃあ、ストレートフラッシュルームとかもあるわけ？」

「あるわよ。大愛グループのホテルは全部そう」

「へえ」

「泊まったことないの？」

「あるわけないだろ！」

「ふうん」

こっちは一介の庶民だぞ！

「さあ、チェックインしましょう。従業員は全員、開店まで準備とあるから、もうみんないるわ」

「へえ」

そう言っただけは既に歩き始めている大愛の後を追った。何故、ここでリムジンが出てこないのかを訊くと、

「この程度の距離に車は必要ないの。省エネよ」

だそうだ。お嬢様は省エネまで考えられて余裕だな。だが、俺は車で行きたかった。暗いし寒いし……。男らしく、とかそういう問題じゃなく、人間として根本的にやられたら駄目だろう。そう考えながら寒さを紛らわせていた。

俺じゃなくてもよかったのか。

「あの、さ」

「何？」

「ロイヤルストレートフラッシュルームって何室もあるのか？」

「いいえ、1室だけよ」

「だよな……。じゃあ、2人同じ部屋に泊まるのか？」

「ええ、そうよ」

赤面注意報発令！

「じゃあ、どこで寝るんだ？」

「ベッドはツインよ」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

「つまり、神林君はわたしと同じ部屋で寝るのか、ということを訊いているのね」

「まあ、そういうことだ」

「答えはイエスよ」

赤面警報発令！

「ツインだから、どうでもいいでしょ」

「お前は女だろ。そして俺は男だ」

「そんなの知っているわ」

「なのに同じ部屋だぞ。親がなんて言うか……」

「親には了解を取ってあるわ。それに親がこれをやってほしいと言ってきたの」

「ソレハイットアイドウィウコトデショウカ」

それは一体、どういうことでしょうか、と言おうとしたのに何故か片言になってしまった。

「親の依頼なのよ。セレブな夫婦、若しくはカップルが宿泊した、という設定でやってほしいんだって」

「夫婦……カップル……」

なんで俺なんだ？

「何故、神林君なのかと言うと……って神林君分からないの？」

「ま、まさか……。お、前がお、れのことを好、きだから？」

「それはないよな！　しかし、赤面警報は解除されない。」

「まあ、それもあるけど。親の命令ね」

「親の命令か。やっぱりグループだけあってそういうのがあるんだろうな。」

「ん！？」

「なんか、大愛、俺にとってそれなりに都合のいいことを言わなかったか？」

「『まあ、それもあるけど』ってどういうことだ！？」

「そうだ、ここだよ、ここ！　どういうことなんだ！？」

「そのままの意味よ」

「そのままの意味って、どういうことなんだ！？」

「またこんな会話をするの？」

「俺は考え直す。」

「いや、しない」

「それが利口ね」

「利口って、俺は犬じゃないぞ。」

「その話は追々するとして、もう1つの理由は他の人は色々、用事があるからなの」

「つまり、俺じゃなくてもよかったのか」

「だよな、やっぱり。赤面警報解除。」

「うーん。そうなのかしら」

「え？」

「他の人に用事がなかったとしてもわたしは神林君を誘っていたと思うわ」

「え……」

「急遽、赤面警報発令！」

「まあ、そういうことよ」

どういうことだ？

「そういえば、さつきから神林君は『赤面注意報発令』とか『赤面警報発令』とかブツブツ言ってるけど、何？」

「聞こえてたのか！ 赤面警報、注意報ともに解除される。代わりに青褪め警報発令。」

「え、そ、そうか？」

「しらはつくれるが、どうだ？」

「でも、言っておくけど、周りは真っ暗で何も見えないし、見えたとしても寒くてどちらも顔は赤いわよ」

「そうだった！ 青褪め警報解除！」

「今度は『青褪め警報』？ そんな警報あった？」

「気にしないで！ さあ、急ごう！ もう少しだ！」

「ホテル・ザ・屋敷はあと1キロほどのところ。もうすぐ着く。」

「そうね。ホテルに着いてからが楽しみね」

「えっ！？ あ、うん！」

「声が裏返った感じがするが気にしない！ ホテルで何をするかを考えるだけで精一杯だ！」

俺じゃなくてもよかったのか。（後書き）

一応、この小説は敢えてジャンルに分けると『学園』モノです。ですが、なんだかラブコメっぽくなるし、学校関係なしに北海道の更に稚内まで行ってるし……。これからどうなるのでしょうか。誰かに指揮してもらいたい気分です。そんな感じの捻くれ少年（以下略）！ これからもよろしくお願い致します！

ここまで来てトランプって……。

「ここがホテル・ザ・屋敷よ」

俺たちはやつとホテルに到着する。しかし、見えているのは1階で看板には『恐怖！お化け屋敷！！』と書いてある。その横に小さく『ホテル・ザ・屋敷』。

「下から見ると更に高く見えるな」

上を見すぎて首が攣りそうだ。攣らないと思うけど。

「何階まであるんだ？」

「地下3階から地上50階まであったはずよ」

「50階……」

それって何メートルだ？

「入りましょう」

「あ、うん」

中に入るって、どうやって？ 入り口はお化け屋敷のしかないぞ

！ 大愛はその入り口から入っていく。

「え……」

俺も仕方なく続く。お化け屋敷なのにドアが自動って何で？ ホ

テルだからか。

「いらっしやいませ」

いきなりの挨拶。中が眩し過ぎて何も見えない。

「神林君、大丈夫？」

大愛が優しく手を差し伸べてくれるのかと思ったら立ったまま笑っているだけだった。

「というか、いらっしやいませって、俺たち客じゃないだろ……」

「いいえ、お客よ。そういうシチュエーションなんだから」

ああ、なるほど。そういうシチュエーションですか。分かりましたよ。

やっと目が見えるようになる。どうやらここからホテル組とお化

け組に分かれて行動できるようだ。

「わたしたちは部屋に行くからエレベーターに乗りましょう」

「お荷物お持ちします」

ボーイというやつが俺のスーツケースを持ってくれる。

「あれ？　そういえば大愛の持ち物は？」

「わたしは送ってあるわ」

そういうことか。

俺たちはエレベーターに乗る。だが、50階行きがない。

「えっと、50階ってどうやっていくんだ？」

49階で降りて階段か？

「この鍵を使うの」

大愛が鍵を取り出す。こういうホテルはオートロックだと思ってたのに鍵をもらってておかしいとは思ってたんだよな。嘘じゃないぞ。大愛は鍵を49階行きのボタンの上の穴に差し回す。するとエレベーターが動き出す。

「すごい仕組みだな」

「そう？　普通じゃない？」

普通じゃねえよ！

「わたしには普通に見えるわ」

「はいはい。いいご身分で」

「何か言った？」

「言ってませんよ」

その時、エレベーターが止まる。

「もう着いたのか？　早いな。それにエレベーター独特のフワッていう感覚やエレベーターが動いている感じが無かったぞ。どういうことだ？」

「普通でしょ」

だから、普通じゃねえよ！

「さあ、行きましょう」

そう言って、エレベーターを降りる。そこは、もう部屋だった。

「何だ、これは？　普通はまたドアがあつて、そこから部屋なんじゃないか？」

「当ホテルのロイヤルストレートフラッシュルームは50階丸ごとロイヤルストレートフラッシュルームなんです」

ボーイさんが説明してくれる。2回目の『ロイヤルストレートフラッシュルーム』を噛んだのは目を瞑る。

「すげえ」

一言しか出ない。

「では、お荷物はここに」

「あ、はい。ありがとうございます」

「何かありましたら、そのボタンをお押しください」

そう言つてボーイさんはエレベーターの近くにある『STAFF
BUTTON』を指差す。分かりやすい。

「分かりました」

ボーイさんはスーツケースをソファの近くに置き、エレベーターで降りていった。

「さて、何する？」

大愛が訊いてくる。

「えっと、何が出来るんだ？」

部屋が広過ぎてどこにいればいいのか分からない。大愛はソファに座っているが、普通は座るのが憚れるような高級感溢れるソファだ。だが、一応俺もソファに座る。少しは覚悟していたが、予想以上に沈む。柔らか過ぎるぞ、おい。

「トランプでもやる？」

「ここまで来てトランプって……」

「ここはロイヤルストレートフラッシュルームよ。ポーカーなんていいんじゃない？」

大愛は備え付けだというトランプを取り出す。いやいや、純金のトランプなんか見たことないから。

そのトランプを華麗に切つて、配る。

「このトランプ、やりにくくないか？ 少し重いし」

「普通でしょ」

「普通じゃないんだって」

「それは神林君が普通じゃないんでしょ」

それから俺と大愛はポーカーで5勝負した。結果は1勝4敗で俺の負け。しかもその1勝が大愛が思いつきり手加減した初戦というのだから俺はポーカーには向いていないのだろう。

時計を見るともうゴールデンウィーク初日の午前1時を過ぎていた。

「そろそろ寝ましようか、神林君」

「そうだな」

俺と大愛は寝室へ行った。滅茶苦茶広い。何だこれは。1つのベッドが天蓋付きだった。何の毛なのか分からないが凄く柔らかい。このホテルのものは全て柔らかいのか？

ベッドが2つ並んでいたので必然的に大愛は俺の隣のベッドで寝る。が、しかし。どちらもベッドが大き過ぎる為、俺と大愛は10メートル程離れることになってしまった。これならポーカーをやっているほうがマシだ。

「これで寝るのか……」

無理だろう……。俺は深い溜息を吐いた。

女子はそうだろうな。

「なあ、いくら何でもこのベッド、大き過ぎないか？」

「普通じゃない」

だから、お前の普通は普通じゃないぞ！

「じゃあ、わたしは着替えてくるから。神林君はここで着替えててね」

「ああ、分かった」

大愛へ別の部屋に行く。更衣室があるらしい。

「じゃあ、何で俺はここで着替えるんだ？」

と、疑問を口にしたが、そんなことをしても意味がないので、渋々着替える。3分で完了。大愛はまだ戻ってこない。

「俺は何をしていればいいんだろう」

全くやることがない。この部屋で突っ立っていればいいのか？

「いやいや、それはマズいだろう。大愛が戻ってきたときに俺が立っているだけだったら困惑するに違いない」

『微妙に優しい』という一面を見せたと思う俺だった。

「いやー、こんないい面を持っていたなんて驚きだな。ホント、自分のことって意外と知らないもんなんだな。もしかすると大愛のお陰かもしれないな。大愛様々。なんだかいいことをすると晴れ晴れするなあ。こんないい気持ちは初めてだな。いいことをするといい気持ちができるのか。この感覚がずっと続けばいいんだけどな」

「大丈夫？」

「万事オツケー、問題ナッシング、ノープロBLEMですよ！」

俺は声がした方を向く。大愛だった。いや、俺と大愛しかいないのだから当たり前だ。

「全然大丈夫じゃないわね」

「あ、いやいや大丈夫、大丈夫！俺の決め台詞を考えていただけだから！」

咄嗟の嘘。おそらく見え見えのバレバレ。

「そう」

この反応がバレてる証拠。

「さて、もう遅いから寝ましょう」

「あ、うん」

何かやらないのか……と、何でもやらないんだろう、という二つのことを考えながらベッドに入る。フッカフカのフワフワだ。これで寝ちゃうと家のベッドでは寝れなくなるかもな。

大愛は手を叩く。すると電気が消える。

「すごい仕組みだな」

「普通」

「じゃねえよ」

「そうかしら？」

普通じゃない。だが、それを大愛に説明する時間が無駄だ。

「んじゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

寝れねえよ！ なんだこの柔らかさは。慣れな過ぎて寝れない！

「ねえ、神林君。起きてる？」

大愛もまだ起きてるようだ。

「ああ、寝れるわけねえ」

「それはわたしが寝た後にこっちに進入するから？」

「んなことしねえよ！」

一瞬だけ考えたけど。でも、しない。しないぞ、俺は！ 心に決めたんだ！ いつまで持つか分からないけど。

「普通、こういうときは『コイバナ』をするんじゃないの？」

おお、意外と普通のことを言った。

「女子はそうだろうな。だが、俺は『コイバナ』の意味を知らないぞ。大愛は知ってるのか？」

「知らないわ。だから、神林君に訊こうと思ったのだけど」

そうだったのか。俺もたまには人の役に立つんじゃないか。

「じゃあ、考えてみるか」

「そうね。何もしないよりはマシね」

考えてみれば、俺はまだ人の役に立っていなかった。ここで大愛にいい所を見せないとな。

「多分、何かの略語だな」

「それはそうでしょうね」

あれ、俺の意見、もうなくなった？ くそお。

「『故意にバターナイフで刺す』の略かしら」

怖えよ。故意につて、確信犯じゃねえか。

「違うだろ。『濃いバーナー』だろ」

「何が濃いのか？ そうではなく、『来いバンナボン』でしょう」
バンナボンつてなんだ？

「全然違うな。『鯉用バナナ』に決まってる」

「いいえ、『故意のバナジウム爆発』よ」

「それはないだろう」

バナジウムつて爆発するのだろうか。俺は分からない。

「そうじゃなくて『濃いバナナオーレ』だろ」

美味そうだ。

「『故意にバカになるな』ではないかしら」

故意が好きだなー。

「掠りすらしてないだろ。『請い、バラードな』で決定だな」

「どういう意味よ」

という感じで俺と大愛は議論した。『古意場馴れ』、『鯉幟離れ』、『コイル場慣れ』、『小池さんバカな』、『口論言い草、バロンな草』、『コメディー、インディアン、バイオリン、ナーバス』、『小坂、井坂、浜坂、名坂』等々、色々出てきた。が、どれが正解か分からない。

そしてとどのつまり、

「神林君、携帯電話持ってないの？」

「ケータイ？ あるぞ」

「それで検索したらいいんじゃない？」

「あ……」

ということになり、検索したら『恋話』の略だった。

「あっけないわね」

「そうだな」

「わたしの『光熱費一気に落ちるバイオ燃料な家』が一番良かったわ」

日本語が若干おかしいぞ。

「いやいや、俺の『効果抜群色仕掛けでバッチグーな作戦』がMB Rだろ」

「MBRって何？」

「『最もベストな略語』の略」

「そんなの聞いたことないわ」

「俺が作ったからな」

俺が審査委員長だぜ。

「何よそれ！」

俺と大愛はそんなことを話していたが、それはそれでそれなりにそれとなくそれでも楽しかった。

散々な目に合った……。

「散々な目に合った……」

家に着いた俺の第一声はそれだった。

結局一睡も出来ず視察開始。以下、俺の感想。

ジェットコースター：一周6kmつてのがありえない。更にそれを時速120kmで走る。一回で酔った。

コーヒークップ：大愛と同じカップに乗った。それはいい。だが、カップの中に入っているコーヒーが暑かった。なんであんなものが入っているんだ。視察の為に連続で乗った所為で、五回で酔った。

お化け屋敷：せめてこれだけは普通であってほしかった。だが、大愛グループはお化けに対しては苦手らしく全然怖くなかった。だからこそお化け屋敷の上にホテルを作るんだろう。酔う要素が無かった。大愛も「キヤー」と言っつて、抱きついてこなかった。一応、期待はしていた。

メリーゴーランド：ケータイに乗った。大愛はパソコンに乗った。乗っているもの意外は 大愛グループにしては ごく普通のメリーゴーランドだった。何故、ケータイやパソコンがあるのか教えてほしかった。特に酔わなかった。

観覧車：これは遊園地において、派手で壮大で広大である必要がある、と思っっている。だが、それ以上にロマンチック性が求められるはずだ。観覧車を使っつて、告白やらプロポーズやらをした人も多いと思っつ。そんな観覧車。ハート型。これには工夫がしてあっつて、ハート型でもぶつからないようになっていた。なっつてはいたがそれがどういっつ仕組なのかは分からなかった。大愛には訊かなかった。訊いても「普通でしょ」の一点張りだろっつから。酔う理由がないほど遅かった。これは何に對する配慮だっつたんだろうか。

この日はこれだけで終わっつた。1つに1、2時間かけているから

仕方ない。

そして今日、5月4日、みどりの日。ここで説明をすると今年のゴールデンウィークは学生にとつては三連休だけだった。これには日本全国の学生が落胆したことだろう。俺もその一人だ。学生の話はおいといて。よってゴールデンウィークの始めというのは今年は俺にしてみれば5月3日。大愛が迎えに来たのは5月2日。つまり、あと2日でゴールデンウィークが終わってしまう。大人には有給なるものがあるだろうから、5月1日と5月6日にそれを取れば10連休らしかった。俺には関係なかった。俺は学校でも結局寝てるだけだから特にいつもと変わらないのだろうが。

酷く脱線した。閑話休題。

またしても一睡も出来なかった。大愛は全く気にも留めなかった。こいつだって、寝てないはずなのに！因みに3日の夜は大愛とどちらがMBRに相応しいかを議論していた。今思えば馬鹿らしかった。潔く負けを認めて寝ればよかった。寝れるかは微妙だったけど。今日は昨日乗ったのとは違うやつに乗った。こっちは脇役みたいなものでどれも1回乗ったら終わりだった。こういうのは比較的楽だったがやつぱりいくつも乗るのはきつかった。普通に酔った。

そんなこんなでホテルをチャックアウトし、寒い外を歩き、ジェット機に乗り、空港に着き、リムジンに乗り換え、家に着く。それが今。親はまだ帰ってきていない。いつもそうだけど。

時計を見る。12時過ぎてるじゃないか。俺は部屋に行き、着替えもせずに寝た。グッスリ寝ることが出来た。

翌日。5月5日、こどもの日。

起きた俺。時計を見る俺。時計が狂ったんじゃないかと思う俺。夕方に起きたことを知った俺。思いつきり落胆した俺。寝過ぎだった俺。

ケータイには大愛から着信が10分間に3本あった。それも4時から。タフなやつだ。ナポレオン以上に寝なくても大丈夫なのか？ そりやすげえな。新たな情報を得た。

適当にご飯を食べ、風呂に入る。母さんからの電話ではこのまま明日は仕事へ行つて、夜に帰ってくるらしい。子供のことを考えたらどうなんだ。可愛い一人息子だろ。

明日からはまた学校が始まり、それに気にせず学校で寝て、普通に過ごす日々になるんだろうな、と思ってまた寝た。1日に見てもれば寝すぎかもしれないが、3日分だ。ぐっすり寝た。

そうして、俺の今年のゴールデンウィークは終わった。

散々な目に合った……。　（後書き）

一気にゴールデンウィークを終わらせました。そろそろ、次の話に行かないとつまらなくなってくる頃だと思いました。それだけの理由ですが、それこそが理由でそれなりの理由でそれが大事な理由です。今回は神林君口調だった『捻くれ（以下略）』応援よろしくお願い致します！

何がどうなってこれがこうなったんだろう。

「おい、お前行ったか？」

「いや、行つてない」

「どうする？」

「誰が行ったやついるか？」

「行つてない」

「行つてない」

「行つてない」

「どうすりゃいいんだ……」

教室がそんな感じでざわついている時に俺は教室へ入った。先生はいない。よし、遅刻じゃない。

みんなが俺を見る。俺って人気者？

「なあ、神林。お前さあ4日に学校来た？」

若戒が訊いてくる。確か4日は色んなものに乗って、酔ってたな。昨日も二日酔い的な感じでヤバかった。

「俺は行つてないぞ。用事があつたからな」

「うわー」

全員、落胆。

「それよりも時間だぞ。席に座つてないと篠原先生に怒られるぞ」

優しい俺はみんなに助言する。みんなはハツとして一目散に自分の席に着く。そこまで急ぐことはないだろう。

「オホン」

俺の後ろで声が聞こえた。俺は恐る恐る後ろを見る。そこには、

「あれ？ 教頭先生？」

尾田教頭おたがいた。篠原先生じゃないのか？

「君、席に座りなさい。もう時間だ」

「はい」

俺は大人しく座る。そりゃあ、教頭先生だもんな。言うこと聞い

ておかないとな。

「大まかに言うと、今日から篠原先生に代わって新しい先生がこのクラスの担任になり、社会の先生をする」

いくらなんでも大まか過ぎるだろ！

「西尾先生、入ってきてください」

入ってきたのは若い男の先生だった。

「では、あとは西尾先生に訊きなさい」

そう言い残して教頭先生は教室から出て行った。

「えっと、では自己紹介をします」

そう言って先生は黒板に『西尾』と書いた。篠原先生のような持病は持っていないみたいだ。つまらない。これで社会の授業も俺は寝ること決定だ。

「宇宙局部超銀河団乙女座銀河団局部銀河群銀河系オリオン腕邊緣部太陽系第三惑星地球亜細亜州東亜細亜日本国東日本東北地方青森県北津軽郡板柳町出身です」

おおっと！ なんつった！？

みんなもポカーンとしている。大愛ですら。

「津軽弁はこっちにいる時は抜いていますが、実家に帰ると出ます」
西尾先生は笑う。

「あの、篠原先生はどうしたんですか？」
領地が訊く。

「篠原先生はいま流行りの育休というやつだよ」

いま流行りなのか！ 知らなかった。

「でも、篠原先生は未婚じゃ……」

陣が訊く。

「いま流行りのでき婚というやつだよ」

本当に流行ってるのか？

「えっと、1時限目は社会だね。じゃあ、みんなのことを知りたいから自己紹介に1時間使おう」

別に異論はない。

「じゃあ、号令かけよう」

「起立」

学級委員の谷沢が言う。

「注目、刮目、着目、一目、礼！ 着席」

いつも通りよく分からない号令をかける谷沢。西尾先生は特に気にしていない。

「一体全体、何がどうなってこれがこうなったんだろう」
俺はそう呟いた。

何がどうなってこれがこうなったんだろう。(後書き)

またまたおかしい人が出てきました。実は先生の名前、加賀崎以外はちよつとした法則性があります。『篠原、尾田、西尾』で検索すれば一発で出てきます。駄目じゃないかと言われも貫く予定……。『捻くれ(以下略)』、登場人物、ストーリー、全部ひっくるめてこれからもよろしくお願い致します！

何なんだ、あの先生は。

「えー、では、改めて自己紹介をします」

西尾先生が喋り出す。

「僕の趣味は読書。と言っても絵本でも、歴史書でも、雑誌でも、漫画でも、電子書籍でも、ケータイ小説でも、広辞苑でも、英和辞典でも、漢和辞典でも、六法全書でも、画集でも、詩集でも、写真集でも、新聞でも、その4コマ漫画でも、どっかのミュージシャンのファンブックでも、訳の分からない機械の取り扱い説明書でも、行く予定の無いツアーのパンフレットでも、赤の他人のノートでも、1歳児のスケッチブックでも、名前を聞いたこともない流派の武芸書でも、何も書いていないA4紙でも、縮尺の怪しい世界地図でも、動物の図鑑でも、インターネットの掲示板の書き込みでも、ハリウッド映画の英語のままのスタッフロールでも、寺子屋の教科書でも、初回のギネスブックでも、その他諸々なんだって読みます」

後半のものは読んでも読書と言えるのか？

「因みに性格は、そうだな……無口だ。どれくらい無口かと言うと、喋らな過ぎて場が重くなって床が抜けるくらいだな。前に僕と同じように無口な人と一緒にカフェでコーヒーを飲んでいたらカフェの空気が重くなって全壊した。またある所ではかなり喋る人とシヨッピングセンターに買い物に行った時にマネキンが全部倒れました」

全然無口じゃねえよ！　かなり喋ってるぞ！

「という嘘です」

嘘なのかよ！

「好きな異性のタイプは、背が高く、痩せて、髪が短くて、気が短くなくて、素直で、泣き虫で、本好きで、犬好きで、バツ八が好きで、運動神経抜群で、頭が良くて、程よく綺麗好きで、色んな人に気を配れて、友達が多くて、明るくて、大らかで、優しい、そんな女性です」

条件多いな！

「でも、背が低くて、太ってて、髪が長くて、気が短くて、我儘で、怒りっぽくて、本嫌いで、猫好きで、モーツアルトが好きで、運動が苦手で、頭が悪くて、潔癖症で、自己中心的で、友達が少なくて暗くて、神経質で、厳しい、そんな女性も好きです」

結局、誰でもいいんじゃないか！？ バツハの反対はモーツアルトなのか！？

「では、質問タイム。どんな質問でもいいですよ。彼女はいるのか、付き合った事のある女性は芸能人の誰に似ているか、無人島に1つだけ持っていけるものがあるとしたら何を持っていくか、願いが1つだけ叶うなら何を願うか、好きな漫画は何か、好きな惑星は何か、好きな星、好きな星座、好きなアイドル、好きな歌、よく見るテレビ番組は何か、ギリシャ神話で何の神が好きか、カーテンの柄は何か、時計はロレックスでスーツはアルマーニなのか、ガムを最高何分噛み続けたことがあるか、デジタル時計を見た時に数字がぞろ目で喜んだことがあるのは何回か、家の住所、ケータイの電話番号、車の車種とナンバー、親戚の名前、見たことのある有名人、母の臍線の代金、父の浮気回数、友達の人数、同窓会で名前を覚えてもらっていたか、等何でもOKです」

よくある質問から聞いたことない質問まで、例を出しすぎだろ。

「はい！」

『歩いて走って踊れる噂情報誌』こと兵法が手を挙げる。

「西尾先生は散歩が好き、とい噂を耳にしたのですが、本当ですか？」

もう噂が回ってるのか！ 早くないか！？

「よく知っているね。確かに僕は散歩が好きです。日曜日に本を図書館から10冊借りて5時間散歩します。そして家に帰る前に本を返します」

「全部読むんですか？」

「勿論。全部読まないと返さないよ」

生徒が質問している時は流石に喋らないようだ。

「つまり、30分に1冊読み終わるんですか？」

「その通り」

「速読なんですか？」

「そりゃそうだろう。そうじゃなくて30分に1冊って何の本なんだ？」

「いや、速読ではないです」

「違うのか。じゃあ、絵本でも読んでいるのか？」

「文庫本を持って散歩します。だが、速読では無く、普通に30分で読み終わります」

「速読ではないけど、読むのが速いのか？ 境界線はどこだ？」

「僕は速読ではないので分かりませんが、速読をすると感情移入出来ないらしいんです」

「そうなのか？と大愛に小声で訊く。頷く大愛。へえ。」

「本を読むからには感情移入したいので速読はしません。なので泣きながら散歩をしていたこともあります」

「一種の不審者じゃねえか。」

「その時は何故か犬の散歩をしている女子高生も、健康の為に何歩も歩く人も声をかけてくれませんでした」

「当然だ。俺だって声はかけない。道の端に寄って歩くだろう。」

「わたしも質問いいですか？」

「大愛が手を挙げる。珍しい。」

「どうぞ」

「西尾先生が微笑む。」

「先生は何歳ですか？」

「そういえば、西尾先生はあれだけ色々言ってたのに年齢を言っていない。」

「えっ、気にしますか？」

「一応」

「普通に喋ればいいのに。何で先生は話さないんだろう。」

その時、終業のチャイムが鳴った。

「おっと、時間だ。その質問にはいつか答えましょう。次は体育です。早く着替えて遅れないようにしてくださいね」

そう言って西尾先生は教室から出て行った。

「えっと、号令はいいのか？」

谷沢が気にしているが全員が無視。いや、イジメている訳ではない。みんな、着替えをするから動いているだけ。

「何なんだ、あの先生は」

俺は呟いた。大愛も頷いた。闇雲も頷いた気がしたが振り向いた時にはもういなかった。相変わらず怖い。

「まあ、いいか。早く着替えよう」

そうやって西尾先生の件、^{くだり}終了。

この学校の先生は何かとおかしい。

「よし、今日は剣道だ！」

宮下先生が言う。

宮下先生は体育の先生だ。そして、授業内容が毎日先生の気分で変わる。先生が柔道の気分だったら柔道、サッカーの気分だったらサッカー。この前、バイクの授業があったが、あれは流石に秋本校長先生に怒られた。先生も俺たちも。

普通、こんなことをやっていては駄目なのだが、先生は上手いことやっているらしい。

今日は剣道か。俺たちはさっさと着替え、それぞれ好きな竹刀を持つ。

「二刀流も許可するぞ」

ラッキーと言って数人の男子（飯塚、沖田、陣、領地、人魯、流川と俺）が竹刀をもう1本持つ。

秋本先生の授業は出席さえしていれば自由参加なので女子の大半（真面目な大愛と剣道部の伊達以外）は応援に回っている。因みに棒術の授業のときは真田も参加する。

「準備運動は各自自由にやれ！」

俺たちは適当に準備運動をして、竹刀を振る。やっぱり2本は重い。けどその分カッコイイと思う。だって、宮本武蔵と同じだぜ。カッコ良過ぎるだろ。うん。

「このクラスで一番剣道が強いのは誰だ？」

全員が伊達を指差す。

「じゃあ、伊達に全員挑戦。勝ったら伊達と交代。いいな」

「はい」

宮下先生は男子と女子に特に壁を作らない。明らかに男子が強くても女子と戦うこともある。

別に俺には関係ないけど。

「よし、じゃあ俺から！」

沖田が言う。二刀流が中々辛そうだ。

「準備できたら勝手に始めろー」

宮下先生が一人で竹刀を振り回しながら言う。その為、先生の周り5mには誰もいない。

沖田は竹刀を両方振り上げる。

「おりゃー！ めくくん！」

二本同時に振り下ろす。

「伊達、用意出来てるのか？」

「あんな打ち方の沖田だったら用意するまでもなく倒せるだろ」

「確かにそうだな」

という囁きが聞こえる。沖田、悲しや。

「胴」

伊達は竹刀を横に振る。

「一本！」

闇雲が言う。いつの間に審判になったんだ。怖え。

「くそ……負けた……」

沖田は悔しがっている。

「ほらな」

「だよな」

「妥当だ」

悔しがっているのを他所にこういう囁きもあった。沖田、哀れだ。

その後も伊達を倒そうと何人もの猛者（自称）が挑んでいったが、伊達は無敗だった。息が上がってすらいない。

「伊達は女だから手加減したんだぜ」

「そうだそうだ。感謝しろよな」

「俺たちが本気出してたら3秒で決まってたな」

「女子に手を出すのは気が引けたのでせめて力を抜いてやったんですよ」

男子たちの無様な負け惜しみが聞こえる。

まだ挑戦していないのは俺と大愛。大愛が先に行く。

「いけー、会長！」

「俺たちが弱らせといたからな！」

「会長ラッキーだぞ！」

いやいや、だから、伊達は息上がってないから疲れてないだろう。

何、変なこと言ってるんだ。

「ありがとう」

大愛が普通に返事する。

「大愛さん、お先にどうぞ」

「では、遠慮なく」

大愛も強そうな雰囲気は出ている。というか、沖田よりは強い。

「面！」

一気に振り下ろす。

「胴」

冷静に大愛よりも早く胴を打つ伊達。お先にどうぞって言ったくせに、先に攻撃している。

「負けちゃった。神林君、頑張つて」

俺と大愛はハイタッチする。それに対して女子からのブーイングと男子からの冷かしに押しつぶされそうになる。が、俺は負けないぞ！ 負けるもんか！

左手の竹刀で防御。右手は振り上げる。これこそ二刀流の正統な構えだろう。

「面」

じゃなくて籠手、と呟く。だが、伊達には聞こえない。俺が面を打つとしたら当たる部分からそれ、俺が面を打つ姿勢ならばそこにいたであろう場所に、

「胴」

を打った。だが、そこに俺はいない。

「籠手っ」と

鮮やかに俺の左手の竹刀が伊達の右腕の籠手に当たる。

「一本！」

闇雲の判定で俺の勝ち。

「負けた……」

「伊達さあ、毎回右にばかり避けてたじゃん。それでパターンが読めちゃってね」

意外と負け惜しみをぶつくさ言ってる奴等も役に立った。

「なるほど、そうか……」

あれ、伊達の周りが暗い。俺、負けた方がよかった？ まいっか。

「センサー！ 俺、勝ちましたよー！」

宮下先生は寝ている。剣道着姿で。よくこんな格好で寝れるな。すげえ。

「あ？ そうか。じゃあ、あとは自由行動。チャイム鳴るまでな」

その瞬間、いきなり男子が襲ってきた。勿論剣道で。

「えっと、みんな面ってどういうことだよ」

俺は呟いたが、誰も聞いていない。あーあ、折角の俺の助言を聞けないなんて残念だな。

「全部上からってことは全部防げるな」

しゃがんで両手を上げる。それによつて20本以上の竹刀を受け止める。更に竹刀と別の竹刀とが絡まって一本一本が抜けなくなつてしまっている。俺はそこまで予想はしてなかった。

試行錯誤の末、右手の竹刀が抜けたらそのまま、胴。全員胴。

「十七本！」

闇雲が言う。

「くそお、インチキだ！」

その時、終業のチャイムが流れる。

「よーし、みんな教室に各自戻れよ」

随分適当だな。

「西尾先生何かおかしい。宮下先生も部分的におかしい。この学校の先生は何かとみんなおかしいのか？」

「次は美術。頑張らしよう」

大愛が微笑んでくる。

「そうだな」

ブーイングやら冷かしやらを気にせず言葉を交わした。

カッコイイから。

「では、今日も好きなように描いてな」

美術の小畑先生が言う。この先生も生徒に好きなことをやらせる。そして先生も先生で何かと作業している。

俺はスケッチブックを開き、先週からの続きを描き始める。これで評価が決まるんだから重要だ。先生は好きなようにって言うてるくせに上手ければ評価が上がるし、独創性があっても上がるらしい。あとは絃を書けば取り敢えずは完成だな。

「大愛は何描いてんだ？」

俺は覗く。

「うわ……」

教科書丸写しっておい……。エッシャーの騙し絵っておい……。

「でも、上手いな……」

それだけ言つて俺は自分の作業に戻る。

実際、大愛の絵は教科書に出ている絵の美化150%増くらいにはなっていたと思う。カラーだったのが証拠だ。うん。

谷沢のも覗いてみる。数式やら漢字やらが書いてある黒板の絵を描いている。意味分らない。

「お前、美術なんだからもっと美術っぽいことを描けよ」

「神林に言われる筋合いはない」

俺の絵は素晴らしいぞ！

ついでに闇雲のも……ん？ 闇雲？

「あ、闇雲いたんだ」

全然気づかなかった。

「わたしは学校生活9年目だけど、1回も休んだことはないわ」

マジかよ……。

「フフフッ」

怖いって……。

そんな闇雲の絵は花畑だった。全部黒いバラ……。怖いよ……。

俺は俺で真面目に描いてみよう。

「神林君は何を描いているの？」

大愛が訊いてくる。

「よくぞ訊いてくれた」

俺はまだ完成はしていないが大愛に見せる。

「何、これ？」

分かるだろう。

「ギターだぞ、ギター」

まだ、絃は描いてないけどな。

「ギターね」

何か文句あるのか？

「わたしには犬に見えるのだけど」

「は？」

いやいや、どう見てもギターだろう。俺は絵が下手だがそこまではいかないはずだ。

「確かに犬だな」

谷沢も言ってくる。五月蠅い！

「犬ね。フフフッ」

闇雲……。怖いよ、ホントに……。俺に対してはほぼドンキリだろ。やめてくれよ。

でも、どうしてギターが犬になるんだよ。謎だ。

「先生に見せてくる」

小畑先生は石膏を糸鋸で削っている。何を作ってるんだろう。

「先生！」

「何だ、神林」

こつちを見ないで声だけで俺だと当てたこの先生はすごい。

「これ、何に見えます？」

「ん？」

先生は俺の絵を見る。

「犬、か？」

「え……」

俺は落胆して席へ戻った。

「ほら、犬でしょ」

もう黙ってくれ。

「そのまま犬を描いたらどうだ？」

「いやいや、俺はギターを描いてたんだ。犬には出来ないぞ」

このままギターを描く！

「そもそも、何でギターなの？」

「カッコイイから」

「え？」

えー、分かんないのかよ。

「ギター弾けたらカッコイイじゃないか」

「そう？」

「そうだ」

「そうかしら？」

「そうなんだ」

大愛も谷沢も闇雲も腑に落ちない顔をしている。

「ギターを弾ける、イコール、カッコイイ。分かったか！」

「ふうん」

「ふうん」

「フフフ」

フツ、素人には分からないさ。俺は俺の道を行くんだ！

俺は思いっきりガッツポーズをした。他の3人に白い目で見られていても恥ずかしくなんかないぞ！

俺、変わったな。

「今日もお前はいるんだな」

学校からの帰り道。いつも通りと化した大愛との下校。

別に嫌という訳ではない。でも、何かあったら、と思う。何もないけど。

「ねえ、神林君」

「なんだ？」

「質問、していい？」

「またモニターか？」

「そう思ってもらっていいわ」

ということはモニターではない部分も混ざるのか？

「なんで神林君は授業中に寝ているの？」

「授業中だからだろ」

その話は一番最初にしたと思うが……。

「じゃあ、夜、何しているの？」

「え、えつと、寝てる」

「じゃあ、昼も夜もずっと寝てることになるけど？」

絶対、こいつ知ってるぞ。今までもそんなパターンだったぞ。

「そ、そうさ、俺は、ずっと寝てるんだ」

わざとらしいな！。

「違うわね」

ほらー。絶対、知ってるー。

「21時からパソコン。3時までやってるわね」

はい。そのとおりです！

「知ってただろ」

「某動画投稿サイトを見ているのね」

そこまで分かるのか。

「なあ、それって盗聴とか盗撮と同じようなことしてないか？」

「誤解しないで。あくまでもモニターよ」

「そうか！」

分かったぞ！

「ゴールデンウィークで、俺を連れて行ったのもモニターだったんだな！」

「そういうことしておきました」

そういうことしておかれた……。そういうことなんだろう。少し残念がる自分がいた。

「じゃあ、さようなら」

俺の家の前で大愛と別れた。毎回、俺の家まで来てくれる大愛は途轍もなく優しいんだろう。

「なんだか、俺、変わったな」

しかもいい方向に。

「ただいま」

誰もいない家に挨拶をする。

家には家の神様がいるから、人がいなくても挨拶をするもんだぞ、と父さんに言われていた。

俺は偉いから挨拶をするんだ。自画自賛だった。

「今日はー、夜はー、何をー、食べよー、かなー」

冷蔵庫チェック。ジャガイモ、ニンジン、たまねぎ、その他諸々。

「カレーだな」

ルーもある。よし決定。

手際よくカレー完成。ホント、俺はいい主婦になると思う。

「うん。いつも通り美味い」

思いつきり自画自賛。だけど、美味いんだからいいじゃないか。

食べ終わったら適当に皿洗い。食事中に洗濯終了。洗濯物を干す。丁度干し終わった時、風呂が沸く。ここまでの手際のよさはもう経験だな。かなりいい主婦になるな。

風呂での考え事。大愛について。

大愛は優しいと思う。頭いいし、綺麗だ。

それなのに何故か俺をモニターしている。あれ？俺がモニターしているんじゃないか？

「まあ、そんなことは置いておく」

生徒会長を務めている。それは尊敬出来る、と思う。俺は大して尊敬していない。だって、たかが生徒会長だから。されど生徒会長にはならない。

全国の生徒会長に聞きたい。君たちは何の為に生徒会長になったんだ？

「どうせ内申というやつのはだろう」

俺は正直に「内申の為だ」と言っただけ。そういうやつがいい。そういうやつは中々いない。でも、そういうやつは人間らしい」

羨ましい。俺も人間らしくありたい。例えば、俺が化物だったとしても俺は何をしてでも人間らしくありたい。下種で貪欲で愚鈍で馬鹿で間拔で阿呆で大袈裟で保身的で自己中心的で自分勝手なのが人間だとしても俺は人間らしくありたい。人間らしさというものを手に入れたい。

俺は人間だ。だが、人間らしいかどうかと言うと頷けない。この通り捻くれている。らしい。だが、それなりに友達はいるし、毎日が楽しくもある。

人間らしさというのは俺の勝手な独断と偏見で基準を設けているんだが、それに合格する人は大勢いる。合格しない人だって大勢いる。俺は後者だ。

「前者、そして善者になりたい」

上手いことを言っただけで笑む。

「偽善者でもいいから善いことをしたい」

偽の善であるのが真の善であるのがその境界線というものはどこにあるのだろうか。

人間は偽善者と呼ばれるのを嫌がる傾向ある、と俺の思い込みか

もしないが、そう思う。

多分、それは間違っではない。嫌がって当然だ。誰だって偽物は嫌だろう。物真似をしている人だって本物の真似をする本物の偽物だ。皆、本物が好きなんだ。本物でありたいんだ。

「そして、自分は本物だと感じたいんだろう」

実証したいんだろう。確認したいんだろう。確かめたいんだろう。認めたいんだろう。

だから、偽物を嫌う。とか何とか俺は中3の頭で考えてみた。結局何がしたいのか全然分からなかった。

「おっと、このままだと逆上せるな」

適当にシャンプーやらボディーソープやらリンスやら垢すりやら、適当に行った。その間10分。思いの外時間がかかってしまった。

「今日は疲れたからパソコンはやめとこう」

お利口な俺は最近のパソコンのやり過ぎを自分で指摘して、自分を諫めて、自分で我慢した。この上ないほどの自画自賛だ。

この後、ベッドでも色々考えるのだが、それはまた次の話にしよう。

更に色々どうでもいいことを考えてみよう。

「更に色々どうでもいいことを考えてみよう」

場所は俺の部屋の俺のベッドの中。

時間は23時。親はまだ帰ってこない。そういえば、この頃は朝しか会ってないな。どうでもいいけど。

話に出てきたから『親』について考えよう。というか、適当に『

親』という存在について色々と思案、思案、妄想、構想してみよう。

「第一問、大体、親って何だ？」

親は親だ。それはそうだろう。正しくは親権を持っている人のことを指すのか？　そういう細かいところは分からない。し、別に知っていても知っていなくても、理解してようがしてまいが、俺には関係ない。

じゃあ、親とは？　俺を産んだ人？　若しくは生んだ人？　そういうことでいいか？　いいことにしておこう。その他考えるの面倒だ。

「第二問、自分が親になったとしたら？」

何でこんなことを考えてしまったんだろう。自分が親になったら？　それはそれでいいんじゃないか？　それ以上に俺が親つてことはほぼ必然的に彼女とか、妻とか、奥さんとか、女房とか、正室とか、愛人とか、そういう関係にある人が存在するわけで、それが誰なのか俺は知りたい。今のところはあの人がいい、なんてことを考えはしない。意味のないことだから。なんてことを言うとかかなり多くの反感を買うのだが、この問題は俺のことだから俺の自由にさせてほしい。

恋愛というやつをしてしまうと人間は視力を失ってしまうらしい。出来れば俺は老眼にすらなることなく、死にたい。あ、視力を実際に失うかどうかは知らない。恋は盲目とか何とか言うじゃないか。そういうことだ。

そんな感じで理性やら何やらを失ってまで人を愛する必要があるのだろうか。勿論、「ある！」と答える人が99%以上を占めるだろう。若しかすると俺もその99%の1人になるかもしれない。だが、今は残りの1%に満たない超少数派だ。いいだろう。恋をするとか、愛をするとか、そういうのは自分次第だ。他人が突っ込むことじゃない。突っ込んではいけない。

だから、お見合いってどうなんだろう、とかごくごくごくごくごくごくごく稀に考える。多分、14年と半年に1回くらい。そして今日がその1回目。でも、お見合いで結婚して今は家庭が円満っていうパターンもあるだろうから中々悔れない。

意味の分らない恋愛ということについて意味分らないなりに、意味分からなく考えてみた。多分、おそらく、きつと、確実に、絶望的に、仮説ですらない、この思想、どうなんだろうか。思いつきり外れているだろう。外れすぎてるだろう。ピッチャーがキャッチャーに向けてボールを投げたのに2塁へボールが飛ぶくらい外れているだろう。例えも意味分からなくなってきた。

「もう訳が分からなくなってきた、意味がなくなってきたから、第三問。自分は親になりたいか？」

そういえば、お題は『親』だった。恋愛の方向へ向かっていた所為で忘れていた。

さて、自分は親になりたいか、どうか。どっちでもいい。なったらなかったでいいし、ならなかったらならなかったでいい。結果的になったのが良かった。若しくは、ならないのが良かった。というどちらかに転べばいい。結果オーライ待ち。

ということでお題については最終的な纏めを出そう。

「親が何だとか、親になりたいとか、そんなもの、いつか分かればそれでいい」

それが俺なりの答えだった。不満があるやつは出て来い！ じっくり議論しようじゃないか。俺が途中で飽きて折れると思うけど。相手が絶対に勝てる裁判だな。負けるんだったら弁護士はいらない

な。だったら始めから戦わなければいいか。よし、最初から俺は白旗を上げる。それでも戦うと言い、決闘の籠手を投げてこようものなら、俺は匙を投げて逃げ出そう。

何だろ。滅茶苦茶変なことを考えていた気がする。決闘の籠手とか、お題から離れすぎてるだろ。さつさと次のお題へ行こう。眠るまで考えるぞ。

「お題は……よし、今日の目玉として『西尾先生について』考えてみよう」

あの強烈なキャラは凄かった。何なんだろう。あんなのは初めて見た。別に見なくてもよかった。というか、見ていると疲れるから見ないほうが絶対に良かった。

「いい方向へ向かいそうな兆しが全くないので一気に纏め」

西尾先生は自分で無口とか言っておきながらガッツリ喋っていた。そんな先生を見て思ったこと。

「ああいう性格の男よりも、寡黙で必要以上のことは喋らない、だがたまに発する言葉は強烈。そういう男の方がカッコイイ」

先生のことを考えてこの結果ってどういうことだろうか。反面教師か。反面教師だったらそれはそれでいい教師だと思う。自分のことを顧みないで生徒の為にそういうことをしているんだろう。違うかもしれないけど。そういうことにしておくのがいい。と思ったり思わなかったり。

「結局、何をどうしたいんだか分からなかったり」

今を精一杯生きようじゃないか！

「なーんて、綺麗に纏めてみちやったりして」

まあ、どうでもいいこと。

そういうことにしておこう。しておくべきだ。しておかなければ「とか何とか言っちゃたりなんかしちゃったりして」

おっと、今の台詞は独島だ。あいつのキャラを奪っちゃ駄目だ。

そんな感じで今日も終わる。とかいう感じで今日を締める。

更に色々どうでもいいことを考えてみよう。（後書き）

久しぶりにあとがきを書いてみる。あ、いや、書いてみます（神林調が抜けない）。

前回と今回、神林の真骨頂、捻くれ語りを存分に出したつもりです（そんな名前を付けた覚えはない）。

取り敢えず、なんとなく、それっぽく、そんな感じで『捻（略）』これからもよろしくお願い致します。

寡黙な男って。

「質問？ いいですよ」

月曜日、朝、西尾先生と俺との会話。

「ですが、僕の、質問に対する返答はかなりの外れだと思えますよ。どれくらいの外れかと言うと、ダーツの矢を投げたのに、隣の的に当たる感じです。つまり、全く、全然、無関係で、無意味で、無意義で、時間の無駄ですが、いいですか？」

俺も先生と似たような例えを最近した気がする。まあ、いいか。

「問題ないです」

元々、期待なんてしていない。

「寡黙な男ってカッコイイと思いますか？」

「なるほど……。それは僕のことを言っているんですね」

違う！！ 断じて違うぞ！！ どこをどう取ったらそうなるんだ！！

「確かに、口数が少ないと、影が薄いと感じられてしまいます。しかし、色々と喋りすぎる男よりは断然いいと思います。どのようにいいかと言うと、キリンがゾウに見えてしまうくらい、いいですね」
どういう例えだ！？ 意味が分からないぞ！

「寡黙な男というのは、的確なことをビシッと言うのがカッコイイと思います。鶴の一声のように、ビシッとバシッとその言葉で全てが決まってしまうような、そういう男、そういう寡黙さ、というのはとてもカッコイイと思います。僕もそれを目指しています」

本当に目指しているのか？ 嘘だろ。

「神林君はそのような男を目指しているのですか？ だとすると、僕を見習うのが一番いいと思いますよ。自画自賛ではないのですが、僕は神林君が言うように、寡黙な男です。そして、それでいて、それなりに、カッコイイと自負しています。しかし、それは自負に過ぎず、他人からどう思われているか、というのは分からないもの

です。自分から訊くのもおこがましいですし、何より、自分のことを他人に訊く、というのは、とても照れてしまうものなのです。全員が全員そうなのかは、やはり分かりませんが、僕はそうです。際立つてそうです。おこがましく感じ、照れてしまいます」

先生は今、俺が先生のことを寡黙な男だと言った、とか喋ったが、俺は何も言っていないぞ。

「若しかすると僕は寡黙な男の中でもトップクラスの寡黙さを持っているかもしれませんが。だって、僕は性格は無口です、と言うとその瞬間、周りの人も静かになってしまいますから。つまり、僕の寡黙さは伝染するんです」

多分、周りの人が、先生の言葉が衝撃的過ぎて固まったんだと思うぞ。だって、全然無口じゃない。

「神林君も僕の寡黙さが伝染したんですか？ 先程から何も言っていないのね。やはり、この力は抑えるべきですね、その為には寡黙というのをやめて、口数を増やすのがいいですかね。いくら何でも、生徒が何も喋らなくなってしまうと、授業になりませんからね」

これ以上口数を増やさないほうがいいと思うぞ。口には出さないが。

「それとも、神林君は僕の口数が少ないので、僕の全ての意図を探る為に何も喋らず、待っているのですか？ それはとても賢い行動だと思えます。そのようなことをされてしまうと、大概の人間は動揺してしまうと思います。僕は心理学には一切全くもって詳しくはありません。素人並み、いや、素人以下でしょう。心理テストなる本等は全然読みませんでしたから」

あれだけ、色々読むとか言ってたのにそういうのは読まないのかよ。

「性格や、体躯、身体、動向、言動、行動、運命、そういったものを決め付けるようなものは一切読んでいません。理由は特にありませんが、自分の人生は自分のものなので、自分が、これだ！と思える道を進むのが最もにして尤もいいことだと思います」

まともなことを言っただよな。多分。

「では、最終的な答えを出しましょう。寡黙な男がいいかどうか、ですね。それはやはり、人それぞれの個性を出せるかどうかにかかっているでしょう。自分は寡黙だ、という概念に囚われず、たまには多くのことを喋るのも大切で、新しい自分に出会うことが出来るかもしれません。はたまた、どんなにお喋りな人もたまには1日くらい、全く何も喋らないと言っても過言ではないくらい口数を減らしてみるのもまた、新しい自分出会うチャンスになりえます。このような答えでいいですか？」

「なるほど。ありがとうございます」

そう言っただ俺は自分の席へ戻った。

分かったこと。西尾先生よりも、俺の方が寡黙だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1107y/>

捻くれ少年と生徒会長とその仲間たち。

2011年11月20日03時22分発行